

国内経済情勢

概 観

決算関係資金その他の資金需要が増大した一方、銀行貸出抑制の方針がとられつつあるため、企業の手元現預金はここへきてかなり取りくずされたが、その水準は前回引締め時に比しなお高く、とくに大手企業の手元は総じて余裕を失っていないようである。

この間、生産は、根強い国内最終需要や輸出の好調にささえられて、依然底堅い上昇傾向を示している。設備投資にも引き続き動意がうかがわれ、また商品市況の面でも、なお頭重い地合いながら、かなりの品目で反騰ないし下げ渋りの動きが目立ち始めている。

貿易収支は、輸出の好調を主因に一段と改善をみているが、輸入の先行指標には下げどまりの傾向がきらかにうかがわれ、この点は、前記生産の動きや企業の態度の今後の推移ともからみ、注目を要するところと思われる。

金融は漸次引き締めつつあるも、著しい逼迫はみられず

6月の金融市場は、上旬中は法人税を中心とする財政資金の大幅な引揚げ超過により、また、月央以降は賞与支払資金を大宗とする銀行券の増発を主因に、総じて繁忙を呈した。この間、約800億円に上る本行の債券買入れが行なわれたが、本行貸出は月中739億円の増加をみ、コール市場も通月引き締めりのうちに推移した。

6月の全国銀行貸出増加額は、2,164億円と前年同月に比し25%の減少となった。当月の資金需要

は、決算関係資金を中心にかなり増大をみたが、貸出増加額規制もあり、その圧縮や一部繰延べがはかられたようである。

このような事情を映じて、企業の手元現預金は5～6月にかけてある程度取りくずされたものとみられ、企業の一部では資金繰りがかなり苦しくなっている向きも見受けられる。しかし、手元現預金の水準は総じてなお高く、企業とくに大企業の資金繰りがここへきて著しくひっ迫したとはみられない。この点は6月の法人税即納率が予想外に高かったことなどからもうかがわれる。なお、企業倒産は前月に引き続き落着きを示している。

生産の基調はなお底堅い上昇傾向

生産は根強い国内最終需要と輸出好調にささえられて依然として底堅い上昇傾向を示している。

6月の鉱工業生産(季節調整済み)は、速報で前月に比べ+1.2%の増加となった。その内容をみると、資本財が、ここ1、2か月完工の集中した大型機械の大幅減を主因に、減少したのを除けば、建設資材をはじめ、消費財(小型自動車、時計、カメラなど)、生産財(繊維)など軒並みに増加している。なお、資本財のうち前月減産となった輸送機械(主として自動車)は、当月再び増加した。

鉱工業出荷(季節調整済み)は、6月中+0.9%と増勢を持続した。前記大型機械の出荷減を中心に、資本財が減少をみたほかは建設資材、消費財、生産財(原糸、石油製品、化学など)などいずれも増加している。

6月のメーカー製品在庫(季節調整済み)は、前月比-0.1%と久方ぶりに微落した。これは主として生産財が石油製品、化学などの出荷好調によ

りかなりの減少を示したことによるもので、資本財では、見込み生産機種の出荷頭打ち傾向を主因に在庫は引き続き増加している。

最近の設備投資は、投資財出荷などの動向からみて高水準で漸増傾向をたどっているものと思われる。先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、4月大幅増加のあと5月も+10.7%と増勢を示した。このような根強い企業の設備投資意欲は39年度設備投資計画や機械受注の見通し調査などにも看取されるところである。

商品市況は頭重い地合いながら、一部商品に反騰下げ渋り

最近の商品市況は、頭重い地合いを続けていることに変わりはないが、このところ反騰ないし下げ渋りを示す商品が徐々に増加している点が目立っている。

すなわち、鉄鋼薄板、繊維などの主要商品が軟調であるのに対し、非鉄、化学、紙・パルプが堅調であるといった従来の傾向はそのまま続いているが、そのほか鋼材の一部(条鋼類)、石油、人絹糸、砂糖なども反騰ないし下げ渋りの商状を呈している。

このような動きの背景には、最近の輸出好調(鋼材、人絹糸)、流通段階の在庫調整一巡(型钢、無規格厚板)のほか、一部業界における生産調整など市況対策の影響またはその期待(石油、人絹糸、砂糖、セメント、軽量形鋼)があることも見のがせない。

6月の本行卸売物価は、食料、繊維の軟化を主因に前月比-0.2%と続落したが、下旬には下げ渋りの傾向がみられ、さらに7月上旬には前旬比+0.2%と反騰した。これは非鉄、紙・パルプが引き続きじり高を示しているほか、鉄鋼、石油・石炭が上昇したためである。

一方、6月の消費者物価(東京)は、前月比+0.1%と4か月間の続騰となった。これは食糧、

家賃地代ならびにサービス料金の上昇によるものである。

輸出の好調から貿易収支の改善は進捗

6月の外国為替収支は、総合で7百万ドルの黒字となった。これは、輸出の好伸から貿易収支の赤字が9百万ドルにとどまり前月に比べて一段と改善をみたうえ、資本収支も長期資本の流入によりかなりの黒字となったためである。

6月の輸出は、為替ベースで前年同月比+24%、通関で+26%と一段と好調を示した。季節性を除去してみても、4~6月の輸出は、1~3月に比し、為替で+7%、通関で+12%とかなりの増加となった。商品別の動きを通関で見ると、機械類が船舶を中心に続伸しており、鉄鋼も米国向け線材、鋼管、欧州向けホットコイルなどを主体に増勢をたどっている。また、先行指標で見ると、輸出信用状は前年同月比+35%の伸びを示し、前年同月の水準がたまたま低かった点を考慮しても、なお顕著な伸長といえよう。

6月の輸入は、為替、通関とも前年同月比+25%前後と依然高水準を持続している。もっとも季節性を除去してみると、4~6月の輸入は1~3月に比べ為替で-4%、通関で-1%といずれもいくぶんの減少を示している。商品別の動きを通関で見ると、食料を除いては、原材料の減少をはじめとして総じて落ち着いている。しかしながら、先行きをみると、このところ信用状なしの輸入の比重が前年に比べ、かなり高まっているうえに、6月の輸入信用状も前年同月比+5%(4月-3%、5月-9%)と下げ渋りがあきらかにうかがわれ、輸入承認の実勢にも同様の傾向がみられる。このような動きの基本的背景として、輸入原材料の在庫率がきわめて低く、在庫調整の余力が乏しいなかで、鉱工業生産の根強い増勢があることは見のがしえない。